

朝日

文化

「希望」は人生に不可欠?

東京大学社会科学研究所が4月、「希望学プロジェクト」と呼ぶ研究を開始した。先行き不透明なこの時代に、希望って何なのか。人はどうすれば、いきいきと人生に立ち向かえるのか。そんな探求を支える、新たな学問の確立をめざすという。責任者の玄田有史助教授(40)に聞いた。(藤生京子)

東大社会科学研がプロジェクト 位置付けの変遷探る



東京大学の玄田有史助教授—東京都文京区で

「若者は言います。『将来のことなんか考えたくない』と。その言葉の背後にあるのは、将来への不満や不安というより、もっと漠とした感覚です」
こう唱える「希望学宣言」の筆力低下で象徴されがちな若者たちの問題は、時代状況とかがわかる。「希望はいつでも存在する」という前提が失われつつある社会で、方向性を見いだせず揺れる彼らこそ、実は社会の危険を誰より早く察知し、シグナルを踏する存在かもしれない、という。

著書『仕事のなかの曖昧な不安』『ニート』で若い世代を労働経済学の立場から考察してきた、玄田さんならではの視点が明確だ。「問題は若い人ばかりじゃないですよ。高齢者だって、果たしてこれだけ希望をイメージできているか」

必要なのは、希望を抱かせるための即効薬ではなく、希望とは何か、から問い直すことだと考える。

冒頭の「希望学宣言」を秋に出すほか、シンポジウムや「希望サロン」の開設も検討する。「サロンはいんな人が入りし、能力を示せる場所になりたい。若い世代がやりたいことを見つけてほしいのは、『希望との出会い方』を大人が伝えてこなかったせいだと思いますから」

「問題はある人ばかりじゃないですよ。高齢者だって、果たしてこれだけ希望をイメージできているか」

具体的な内容はこれから詰めるが、たとえば戦前から戦後の「希望」という言葉の用いられ方の変遷をたどったり、2〜3世代にわたるある家族の歴史を追跡して生活の中の希望のあり方の変化を調べたり。あくまで「社会科学的、実証主義的な形で」調査・分析を進め、希望ある社会の姿を探るといふ。最終的には全6巻の書籍化を目標にする。

ただし、「仲良しクラブじゃなくてね」とも。人と人とは分かり合えないけれど、信頼に基づいたゆるやかなつながりを築く可能性はある——。船出したばかりの「希望学」は、新たなコミュニケーションを模索する場にもなりそうだ。